

# プロレタリアの旗

隔週刊

第七号  
(通刊 307号)  
11月7日(金)  
1部 100円

発行所 「プロレタリアの旗」社  
東京中央郵便局 私書箱三三三号  
関西支社 大阪市福島区大開 一丁目19の13  
電話 〇六一四三二一六七  
沖繩支社 那覇市東郵便局 私書箱〇三三号

## 反動・反革命の十字砲火を勝利への試練とし

# 同盟(ボルシェビキ)第一回大会を戦取

共産同(全国委)の最終的崩壊の姿を暴き出した五・五第九回T女性差別糾弾会と、それを揚棄すべく共産同全国委(ボルシェビキ)の誕生の宣言を発した五・一五闘争から五月。ついにわれわれは共産同全国委(ボルシェビキ)第一回大会を戦取した。

大会は、次の点において日本階級闘争史に新たな一章を刻印するであろう。それは、ひとつには、大会が、追いつめられた北原―西一派による文字通り「最後のあがき」たる十・九の二つの反革命的白色テロルをはじめとするわがボルシェビキに対する物理的・肉体的抹殺の策動と、そして奇しくも同日発売された「週刊新潮」十月十六日号における空前の女性差別・組織破壊キャンペーンという、日帝ブルジョア階級の階級的憎悪とその意を体した、かつてない反動・反革命の十字砲火のまっただ中で、この反動・反革命と真向から対峙して、わがボルシェビキ自らの弱点を大胆に暴き切開きつつ、戦い取られたことである。それは、どのような反動・反革命の密集・純化・攻撃も、プロレタリア階級解放とその先頭に立つ不抜のボルシェビキ党建設の勝利へむけた巨大な試練、またとない糧とした革命の前進に結果するほかにないことを鮮やかに証し立て、プロレタリア階級と革命党は自らに對するどのような抑圧と攻撃をも自らの前進の糧とすることができるといふことをわれとわが身をもって実証したことである。

そしてまたつには、大会が、国際労働者階級の当面する情勢と任務を、「帝国主義打倒/社会帝国主義打倒/世界プロレタリア革命勝利の旗の下、現代過渡期世界の第三期への突入/革命的情勢の全世界的成熟を社会主義世界革命の勝利へ/」日本労働者階級の任務を「日帝のアジア侵略に内戦で応えよ/」との戦略的総路線として明らかにし、その勝利への展望をさし示したことで、ある。みつつには、規約を確定し、鉄のボルシェビキ党建設へむけての礎石を築いたことである。

## T糾弾闘争とわが同盟への階級的憎悪に貫かれたデツチ上げ

### 週刊新潮

1610月付

## を満身の怒り込め糾弾する

## 反革命差別者徒党―北原―西一派の白色テロルに、全階級戦線からの放逐・根絶を回答とせよ

階級闘争の発展は、ひと握りの小ブル日和見主義分子・反動分子を、またたく間に、まごうかたなき反革命徒党に「育て」上げた。労働者階級・人民の前に自らの立脚点に関する一片の声明も出さず、わが同盟と闘う労働者・人民に対する闇打ち白色テロル・肉体的抹殺の策動を唯一の「階級闘争への参加形態」とする西―北原派(今日では、北原―西反革命徒党)がそれであり、十月九日の大阪(未明)・千葉(深夜)における二つの反革命夜襲、および闘う労働者への職場襲撃のいっつかの企み(我々の断固たる反撃の布陣の前に未遂に終わった)がその証左である。

その前衛部隊「革命党」として、反動、反革命との血みどろの闘いをくり抜く抜くとして、自らの成長と最後の勝利はありえないことを。

見よ、勝利は回避である。彼らの二つの反革命襲撃と、日帝・国家権力の意を体しその尖兵をなす「週刊新潮」の空前の女性差別・組織破壊キャンペーン(別稿)という反動の十字砲火にもかかわらず、その試練の中で、十月八日、敢然と共産同全国委(ボルシェビキ)第一回大会はあちとられた。次にはわれわれは、この反動と反革命の十字砲火が、どのような鉄火のボルシェビキ党と労働者階級にわれわれを激え上げずにはおかないのかを、ひとつ、またひとつと立証してゆくであろう。われわれは、彼ら北原―西一派の白色テロルを、必ずや、そのような壮大な闘いの一つのエピソードと化すであろう。

## 絶望的な「最後のあがき」を粉砕し、更なる戦略的攻勢へ邁進する

十月九日未明、北原―西一派の「シエビキ大阪事務所襲撃」、二名「カッター」等をもって襲いかかり、須賀、森内、小山らは、わがボルシェビキ同志に、鉄パイプ、金治二カ月の重傷を負わせて逃走分子・階級闘争の亡霊・破廉恥漢

した。同志二名のうち一名は、この間のT糾弾闘争―女性解放闘争の中軸を担ってきた女性労働者であり、もう一名は「戦犯天皇糾弾皇太子沖繩上陸決死阻止闘争」を支持する会(関西)「事務局員」であり、そのことは、この襲撃の反動的性質を証している。

更に九日深夜、空前の差別者・極右反動反革命分子・居直り腐敗分子・階級闘争の亡霊・破廉恥漢

二、三、四面

六面へつづく







# 現代過渡期世界の第二期 内戦の時代の開始を準備せよ

## 現代過渡期世界論の理論的総括 ②

本田篤紀

我々は、この間つらひあけてきた思想の核心を綱領・戦術へと煮つめあげた。現代革命論を組み立てる際の基本的な歴史認識、時代認識としての過渡期世界論をマルクス・レーニン主義の思想的理論の見地に貫いたものとするため、全面的な総括を前号より開始した。

前号においては、まず第一次共同の歴史・時代認識には、現代過渡期世界論という認識はなく、その歴史・時代認識は構改革派の先進国主義、反スタ・トロツキズムであることを明らかにした。また、現代過渡期世界論の概略を行った。

今号では、現代過渡期世界論の「攻勢の理論」その小ブル急進主義と、それがレーニンとコミンテルンの「攻勢の理論」をどのようにならしていかを明らかにして行く。(編集部)

### 第二章

#### 一向過渡期世界論

##### その小ブル急進主義

(つづき)

### 一向過渡期世界論の概括と

#### その今日的位置

(つづき)

彼の思想の「ブルジョアイズム」は、次のような総括的視点の中に集中して表現されているので全文引用する。

「けい、赤軍派は、ただひたすら、ひたむきに、日帝・国際帝国主義(資本家共)と闘って来た。そしてこの姿勢に於いて我々は、全世界の共産主義者に対して、採れないものと誇るものではない。だがこのように、しつかりと

た根本的姿勢をもつていっつも、闘争は種々の矛盾も生れ、欠陥も発生する。これ等に対して、種々な批判が投げかけられてくる。これらの批判を放置したまま、突き進めば、いつか恩返しして、自己崩壊し、総潰れ状態が生まれ、とるに足らない批判と勢力が台頭してくるものではない。かかる動向に対して、弱点を不断に克服し、党派闘争・理論闘争・思想

闘争を不断に推進し、我々の綱領的立場を、常に、現在の生きた立脚点として保つておくことが必要である。赤軍派は、赤軍派の連赤北軍派は、幾つかの小階級がありながら、全体的には、一過渡期の長期的な侵襲攻撃であった。必要なら、政治・理論上の補修が不十分なまま、連赤北軍派等の批判をとりこむものとして、批判のまにまに委せていた。このことがいつのまにか、同盟の一部日和見主義部分に「過渡期世界論」は間違っているのではないかと、という風潮を生み出して来た。」「一向過渡期世界論の防衛と発展の為に」(八頁、査証出版)

このように、総括的視点から、一体何が生まれるのか、赤軍派の現在の四分五裂の状態は、「思想・政治・理論上の補修を行わねば、党派闘争・理論闘争・思想闘争が、権力争いから批判したるに不十分であった」と

に根拠づけられている。すなわち、この「攻勢の理論」の基礎に潜む「自信喪失と泣き事と受動性」は、どうしたところか。彼らは、自己の階級形成にのみ熱中して、労働者階級全体の指導力に成長することを知らない。自己の英雄主義に對する敵対者は、労働者階級の中からは、日和見主義勢力を駆逐し、革命的勢力とその思想を強化し、決して一瞬の油断も許されない。共産主義の党員の日々の任務、戦術的持久の戦いを全く知らない。

従って、彼らは、プロレタリアートを支配階級に高めようとする、プロレタリア独裁の思想の本質については全く知らない。故に、彼らには、その本質上、党派闘争・党建設の思想が全くない。あるいは全く受動的にしか、即ち自己の直接的な英雄主義の発揚に關する以外にしか、理解していない。党派闘争・党建設とは、何よりも、この思想が、この革命階級が他ならぬプロレタリア階級の中で勝利するのと同じく、この「色あ」が、強まるかによって決定されるのだ。(レーニン)「何をすべきか」(一) 従って、党派闘争・党建設の階級闘争の階級は、何よりも労働者階級自身が握っている。階級は、誰が最も自己の英雄主義を満足させたいかではなく、革命的労働者階級が、どの色あを選択したかにかかっている。この意味では、小ブル自由主義者には、彼らに於いては、始めから、六九年安保決戦の戦術において、武装蜂起・臨時革命政府樹立を主張したのと同じく、ここに於いては、自己の英雄主義への欲求と引きかえに、(即ち、自然発生性への捧腹とひきかえに)労働者階級の指導力に高められる巨大な任務を放棄し、逃亡したのである。

我々が、六九年安保決戦の戦術を、秋期プロレタリア階級の任務として提出することに反対したのは、当然であつて、日和見主義の故ではない。自身の英雄主義を満足させるだけなら、我々は明日でもそれを為すであろう。(それ、君達のように、情弱には、当時の具体的な状態の中で、敗北するに判りきつて、武装蜂起に労働者階級を引きずり込む権利は、マルクス・レーニン主義者にはなかつた。もつとも、引きずり込む力もなかつたのだ。我々にはもつと重要な緊急の任務があつた。

今日、彼らは、これらの総括を全く問はずして、その意味では、依然として小ブル自由主義、英雄主義、個人主義をその運動の最深部に格納したまま、他方において「階級依存路線」を主張している。(三)「三」赤軍派政治集會基調報告)として、「路線と党建設を重視せず、階級依拠路線を重視しないテロリズム」と闘うことを表明している。だがこれは、結局の所、

は、マルクス主義者である、そう考へている。この「攻勢の理論」の基礎に潜む「自信喪失と泣き事と受動性」は、どうしたところか。彼らは、自己の階級形成にのみ熱中して、労働者階級全体の指導力に成長することを知らない。自己の英雄主義に對する敵対者は、労働者階級の中からは、日和見主義勢力を駆逐し、革命的勢力とその思想を強化し、決して一瞬の油断も許されない。共産主義の党員の日々の任務、戦術的持久の戦いを全く知らない。

従って、彼らは、プロレタリアートを支配階級に高めようとする、プロレタリア独裁の思想の本質については全く知らない。故に、彼らには、その本質上、党派闘争・党建設の思想が全くない。あるいは全く受動的にしか、即ち自己の直接的な英雄主義の発揚に關する以外にしか、理解していない。党派闘争・党建設とは、何よりも、この思想が、この革命階級が他ならぬプロレタリア階級の中で勝利するのと同じく、この「色あ」が、強まるかによって決定されるのだ。(レーニン)「何をすべきか」(一) 従って、党派闘争・党建設の階級闘争の階級は、何よりも労働者階級自身が握っている。階級は、誰が最も自己の英雄主義を満足させたいかではなく、革命的労働者階級が、どの色あを選択したかにかかっている。この意味では、小ブル自由主義者には、彼らに於いては、始めから、六九年安保決戦の戦術において、武装蜂起・臨時革命政府樹立を主張したのと同じく、ここに於いては、自己の英雄主義への欲求と引きかえに、(即ち、自然発生性への捧腹とひきかえに)労働者階級の指導力に高められる巨大な任務を放棄し、逃亡したのである。

我々が、六九年安保決戦の戦術を、秋期プロレタリア階級の任務として提出することに反対したのは、当然であつて、日和見主義の故ではない。自身の英雄主義を満足させるだけなら、我々は明日でもそれを為すであろう。(それ、君達のように、情弱には、当時の具体的な状態の中で、敗北するに判りきつて、武装蜂起に労働者階級を引きずり込む権利は、マルクス・レーニン主義者にはなかつた。もつとも、引きずり込む力もなかつたのだ。我々にはもつと重要な緊急の任務があつた。

今日、彼らは、これらの総括を全く問はずして、その意味では、依然として小ブル自由主義、英雄主義、個人主義をその運動の最深部に格納したまま、他方において「階級依存路線」を主張している。(三)「三」赤軍派政治集會基調報告)として、「路線と党建設を重視せず、階級依拠路線を重視しないテロリズム」と闘うことを表明している。だがこれは、結局の所、

小ブル英雄主義、自由主義の裏返しにしかすぎないものでしかない。なせなら、結局の所、彼らは、「労働者階級の解放は労働者階級自身の事業である」ということについて理解してはいないからである。プロレタリア独裁の思想についても、又別の位置についても、今たマルクス主義とは、何だかたつた理解ができていないからである。従って、それはかつて、連赤の総括過程で、佐野茂樹や八木、京大レーニン研の古川君等が主張した「武装闘争と大衆路線の結晶」といううわべの取りつくり(実際は、テロリズムと経済主義の二股路線でしかなく)は、八木君が身にしみて知るところであつた。以上ではないからである。それは依然として、「その階級苦、労働苦をマルクス主義でもって汲みとることの出来るプロレタリアート独裁」社会主義革命の路線をもつた党(同右)という表現に見られる如く、マルクス主義を、小ブル分限の階級形成、精神修養の道具として把握せず、党を労働者の苦悶をマルクス主義的に、最も良き理解者として把握する、理解者としてしか扱えてはいない。この代行業者。

彼らの言ひ方であれば、党の任務は「階級苦、階級苦を心の支え、活動の支えにして、党がブルジョア階級と闘うのだ」という主張である。何も変わっていないのだ。ベトナム人民の苦悶に思ひをよせて、テロルへの糧としていた事を多少修正して、「階級苦、労働苦」に代えたにすぎず、それをもつて「労働者階級依拠路線」と称しているのだ。

まさに、労働者階級が望んでいるのは、彼らの言ひ方によつて「労働者階級の苦悶をマルクス主義でもって汲みとることの出来る党」なのである。人間は、「人間の苦悶を、ハイデルもつて汲みとることの出来る牧師」を生み出しはしたが、到底汲みとつては出来なかつた。ハイデルがマルクス主義にかり、牧師が党にかつたことと同じことである。彼らは、あつたこと、マルクス主義を神学に還元せず、すなわち、マルクス主義をいつかいつか水に流してしまふと主張するのだ。

労働者階級にとって必要とするのは、「マルクス主義の洞察と社会主義を意識的に労働者階級の中に持ちこみ、その階級的・政治的意識を高めて、打ちこまれ、支配階級に高めあげてゆく、労働者階級の前進であり、又その一部隊であるような党」であらう。

彼らは、革命の主体、すなわちプロレタリア独裁と共産主義社会建設の担い手について理解が全くない。従って、彼らは、全くどのような時でも、注意深く「革命家の最も緊急の義務」全面的な政治的煽動の遂行を組織する事、プロレタリアートの階級的・政治的意識を打ちこめ

高めてあげること」を、その任務とするのを回避する。時には経済主義(即ち大衆路線)を、時にはテロル(即ち革命戦争)の主張を高く叫んで、その任務だけは徹底して回避するのだ。彼らに問われている事は、まさにこの最も困難な闘争において英雄主義と自己犠牲性を発揚することなのだ。

次に、赤軍派の存亡を左右する最も基本的な問題は「革命戦争」を巡る問題であり、その一切の理論的根拠となつて「攻撃型階級闘争」の問題である。

だが肝心の点において、彼らは全くその主義を振り増幅させ、又理論的脆弱性を露呈させているのである。

六九年における「前段階武装蜂起」の方針提起は、その基本において、日本労働者階級人民全体の階級的成熟の度合と階級闘争の煮つまりの度合に對する、科学的に厳密な分析が、それに基づいて勝利の確信から為されたのではなく、第一に全世界に現代過渡期世界論という、革命戦争の時代に入っている事、従つて武装闘争以外の闘争形態は、今や全世界で古くなく時代遅れのものになつてしまつた事、又第二に、従来今日では通用せず、侵略と反革命を統一から侵略前夜に階級決戦が前段的に為される事、第三に、これらの諸要因から、六九年秋期決戦の戦術は、武装蜂起・革命政府樹立が、それらが根拠にして為されたのであるが、それらが全くエッセマルクス・レーニン主義的、非科学的なものであつた事は、今日では誰の目にも明らかになつてはいるのみならず、他ならぬ今日の情勢そのものが証明している。

「長期的な侵襲攻撃」とは、だが、赤軍派は、我々の作業プランの遅延にあるのであつて、決して思想的なものではない」と。もううん、八木君よりは、はるかに塩見君の方が、総括を深めてはいるが、そのブルジョアイズムは、共通したものがある。「長期的な侵襲攻撃」は、徹底した合理化のいくるに過ぎない。「長期的な侵襲攻撃」とは、だが、赤軍派は、我々の作業プランの遅延にあるのであつて、決して思想的なものではない」と。もううん、八木君よりは、はるかに塩見君の方が、総括を深めてはいるが、そのブルジョアイズムは、共通したものがある。「長期的な侵襲攻撃」は、徹底した合理化のいくるに過ぎない。

この事を全く理解しない、その意味では、小ブル自由主義者には、彼らに於いては、始めから、六九年安保決戦の戦術において、武装蜂起・臨時革命政府樹立を主張したのと同じく、ここに於いては、自己の英雄主義への欲求と引きかえに、(即ち、自然発生性への捧腹とひきかえに)労働者階級の指導力に高められる巨大な任務を放棄し、逃亡したのである。

「次号へつづく」

好評発売中  
第二号

## マルクス主義

- 資本主義批判と唯物史観について
- 組織論確立の為(II)  
第一部 マルクス・レーニン主義と組織思想  
第二部 党組織と全国政治新聞
- プロレタリア独裁と女性解放(序説)下
- 新たな革命的學生運動の創出へ向け  
共学同を建設せよ

1100円

一面よりつつく  
 腐敗と反動の淵に朽ち果てた共産  
 同(全国委)の名前にだけしがみ  
 つき、「烽火」再建路線に命運を  
 託さざるをえぬ彼らの必然的行末  
 にはある。  
 かの七・一七(二〇)皇太子沖繩  
 上陸阻止闘争に何らの戦術を準備  
 しようと思えぬ、た七・一七  
 から九・三〇天皇訪米阻止闘争を  
 貫いて、闘争列内の思想的・政  
 治的弱点につけ込み、「プロト系  
 反動分子としての延命のための文  
 字通りの最後があがきに他ならぬ  
 潮流の末席に名をたげても連ねて  
 い。かくして、彼らは唯一の巻  
 返し策動の展覧を、物理的的肉体的  
 抹殺「白色テロ」に求めたのであ  
 る。千葉におけるテロの際の後  
 一転して、我がボルシェビキと闘  
 頭部の狙いはまさに肉体的抹  
 殺を意図するもの以外ではない。  
 だけは先の顔ぶれをみてもわかる

ように組織をあげて東奔西走し、  
 あまつさえ、かの皇太子沖繩上陸  
 阻止闘争の激闘の真只中をほじめ  
 この間のあらゆる階級闘争の局面  
 に一切参加したことがない。X組  
 織が、そしてその頭目(北原大塚)  
 が、陣頭指揮で、我々の白色テ  
 ロにだけは必死の形相で乗り出  
 して来る。彼らが果して、誰の  
 ために、何を利益として、日々動  
 いているのか、もはや明らかでは  
 ないか。そうか、またたき、自己の保  
 身の保身のためだけに、闘争戦線  
 内部の思想的弱点につけ込  
 んで階級闘争の前進に敵対するこ  
 を唯一の利益として。

ない暴挙と軌を一にして行なわれ、  
 たことである。このことに最も今  
 回の白色テロの反革命的・反階級  
 的の性格が露わである。また、か  
 り抜けようと「恥の上塗り」なら  
 ぬ「無恥の上塗り」をしてみせた。  
 のR女史は、全国実行委における  
 我々の追及に対して、「襲撃でな  
 らぬ」事件」が、相前後して起

きたのは決して偶然ではない。彼  
 らの反革命徒党への純化で、九  
 ・三〇の暴挙のその意味する事  
 身の行動でもって示してくれたの  
 である。まさに事実は具体的であ  
 り、かつ、無慈悲である。それ  
 利害の前に自らの「私怨」を置き  
 外のことまで一切語ってはくれない

木沢、永井とともに組織し、サ  
 ーカル主義、組合主義を党の理念に  
 祭り上げ、労働者階級を愚弄する  
 三階級案を執事・可決し、全国委  
 を最終的崩壊へ導いた。十二月一  
 月、中央指導部会議において、  
 十月中央委、三階級案の経済主  
 義の本質を暴露されるや、一転、  
 「三階級案は経済主義だ」と  
 自分はマルクス主義を知らないか  
 ら教えなさい」と政治局は破産し  
 た。新指導部について提案してく  
 「北原」の根もかわかぬうちに  
 統一を主張する。そして五  
 統合めざす」の宣言。そして五

月、T科弾会において「全階級闘  
 争からの放棄宣言」を受けた。数  
 ヶ月の「沈黙」。そして今回の白  
 色テロによる「浮上」。以  
 上がこの一年のおまえの罪業のほ  
 んの一端である。一切のプロレタ  
 リア、被差別大衆、被抑圧民族は  
 おまえの罪業の数々を決して許し  
 はない。  
 崩壊の淵で延命を託し、最悪の  
 反革命・差別者北原にその最後の  
 サイを握らせた北原一西一派に  
 された運命は、た、反動と反革  
 命、そして崩壊の坂道をころけ落  
 ちることのみである。そして、我  
 らは、どのような反動、反革命分  
 子からも、それを反面教師として  
 「学ぶ」ことができるのだという  
 ことを実証するのみである。

この白色テロの反動的・反革  
 命的性格の第四は、それが、労働  
 者階級人民の未成熟のスキと革命  
 的翼内部の思想的、政治的弱点に  
 つけ込んで、機会を狙い、それを  
 テコとして行なわれている点であ  
 る。そして、十・九の「  
 二つの襲撃」を文字通り自らの追  
 いつめた反動、反革命分子への万  
 全の武装の不徹底性として徹底し  
 て教訓化し、「敵の戦略的監視と  
 五・五回糾弾会直後の兵庫  
 五・五回後の襲撃にも、いささ  
 かも動せず、ボルシェビキ結成を  
 け給進せねばならない。  
 我々は、断じて西一北原一派を  
 許しはしない。もはや一時も彼ら  
 を階級闘争の中に存在させてはな  
 らない存在させない。彼らの反  
 革命的な一切を体現する我がが  
 革命白色テロには、それに数倍  
 する革命的鉄鎧をもつ答える。  
 文字通り彼ら、全階級闘争から  
 階級人民の弱点(女性差別思想  
 完全に根絶する。我々はプロレタ  
 リア、人民の名において、こ  
 こにそれを宣言する。

マルクス・レーニン主義による  
 団結で、プロレタリアート・人  
 民と我々を打ち破る。階級闘争に  
 もくろみ、小ブルの腐敗(これら  
 が、北原一西一派を容認し、不断  
 に進みだしている根拠である)を  
 あからさまにし、階級闘争から放  
 逐することを促進する。  
 反革命差別者集団「北原一西一  
 派を全階級闘争から放逐せよ」全  
 てのプロレタリアート・人民は、  
 マルクス・レーニン主義を団結せ  
 よ。

我々は、必ずや、北原一西一  
 派を全階級闘争から完全に放逐す  
 ることを宣言する。

# 9・30戦闘局面における背 後からの襲撃は決して偶然 ではない

第三に、この白色テロが、九 戦闘局面一竹サオ戦の最中におい  
 ・三〇天皇訪米阻止闘争の具体的  
 るが全国労働・共学同の同志へ  
 の背後からの二度にわたる襲撃と  
 う、およそ革命運動史上類例の  
 無い。

第三に、差別議案執筆者、悪質  
 な居残り分子として、これまで一  
 切政治的組織に沈黙を余儀なく  
 された北原(大塚)が千葉の下、  
 白色テロの陣頭指揮に立ったこと  
 とに示されるごとく、今日、T科  
 と起死回生の巻返し策動に打っ  
 弾闘争一全国委崩壊の「ほとぼり  
 がさめた」ことを見れば、はから  
 たより本質的には、北原一西一  
 弾闘争の全過程において、首尾一  
 がその戦略的破綻の連続の末に最  
 貫して最も悪質な差別者として立  
 後のあがきを白色テロに求めた  
 こと一対として、その最後の「  
 の圧殺、妨害の唯一無二の支柱で  
 握りどころ」として、北原が、彼  
 であつた。それはばかりか、逃亡分  
 子として、位置しているのである。  
 アートの輝かしい勝利によって、  
 級闘争のみならず、文字通り、世  
 界階級闘争一国際共産主義運動の  
 総決算としての位置を占めている  
 のである。  
 七五年四月一七日のカンパチア  
 解放勢力による「パン」解放と  
 「ロン」ノル政権の打倒、カンボジ  
 アの全土解放に見られるインドシ  
 ナ革命戦争の最後の勝利は、その  
 ことをはっきりと示している。  
 我々は、このような現代の階級  
 闘争の時代を、一九一七年ロシア  
 革命の勝利という世界プロレタリ

曰く、「女性問題ではなく路線  
 問題だ」と、「軍事反対派」云  
 々と。革命的左翼の弱点を継承し  
 続ける小ブル的諸派、小ブル的活  
 動家集団の弱み、耳ざわりの良  
 だが決定的に安易な言葉をもって  
 彼らは助を完て歩いた。  
 だが、事態は、彼の主観的思  
 い込みとは無縁なものであり、一  
 の我がボルシェビキのためには  
 小ブル的諸派による「西一派の学  
 生闘争団が使用される」否  
 か「という決定的に安易な基準に  
 よる容認への甘えが、今日の彼ら  
 の白色テロへの純化という反革命  
 差別者集団にふさわしい真実の姿  
 を映しだしてきたのだ。  
 我々は、西一派の学生闘争団が  
 共闘に加わること引きかえに、  
 マルクス・レーニン主義を敵ブル  
 ジョアジーに売り渡す諸君を断罪  
 する。我々は、目前の自らの利益  
 に、労働者階級人民の未成熟の利  
 益を容認するあらゆる部分をもい  
 ささかも許してはならないことを  
 それは、次の段階で、諸君が第

我々自身の思想的腐敗をまねき  
 労働者階級・人民の隊列の中に腐  
 敗をもちこみ、ブルジョアジーに  
 彼ら売り渡すことが確実になる  
 であろう。  
 われわれは、「最後のあがき」  
 に打って出た北原一西一派を更に

# 内戦の時代へ共に

## ロシア十月革命58周年 記念集会に結集せよ



労働者・大衆に呼びかけるレーニン

全国の闘争労働者、学生、市民  
 の皆さん、  
 現代階級闘争は、とてまもなく  
 を知らな。これは、プロレタリアートとブ  
 ルジョアジーの非和解的な対決と  
 して、すなわちプロレタリア革命  
 の決着として、現代の歴史はまず  
 ます要請している。  
 日本労働者階級の資本の抑圧に  
 対する憤激は高まり、闘いの活性  
 化、それと並行して進行している既  
 成政體の分裂等々として、例え  
 どのような事件を取り上げてい  
 ても、文字通り、「激動の時代」

ロシア革命58周年映画集会  
 11月8日(土) 午後六時  
 大阪市立労働会館  
 ……環状線森の宮下車三分  
 ……講演と映画  
 ……戦艦ポチョムキン  
 主催 共産主義者同盟全国委(ボルシェビキ)  
 全国労働者政治委員会(準)

君の思想的腐敗を断罪する  
 北原一西一派を容認する諸  
 君の思想的腐敗を断罪する  
 北原一西一派を容認する諸  
 君の思想的腐敗を断罪する  
 北原一西一派を容認する諸

- スケジュール
- 11/5 国際婦人年日本会議粉砕・天皇・皇  
 后出席糾弾闘争(午前九時より)
  - 11/5 新潮社糾弾第一波闘争(午後)
  - 11/8 ロシア革命58周年映画集会(別掲)
  - 11/10 七・一八上陸阻止・海洋博粉砕名護  
 闘争第二回公判(10時、那覇地裁)
  - 11/18 七・一七皇太子糾弾闘争(ひめゆり  
 の塔)公判(午後一時半、那覇地裁)
  - 11/25 七・一七皇太子糾弾闘争(白銀病院)  
 第三回公判(午後一時半、那覇地裁)